

佐伯地方の姓氏(一〇)

——「藤」の字のつく苗字(その二)——

佐 脇 貫 一

(会員・佐伯市長良)

◇ 衛藤氏と江藤氏

佐伯地方の古記録には衛藤氏と江藤氏が混用され、同一氏族に使われている例が多いが、使用例としては江藤氏が多い。現在の分布状態を見ると、江藤の五に対し衛藤は一であるが、県南地域全体(佐伯、臼杵、津久見、竹田の四市および南海部郡、大野郡、直入郡)から見た分布は断然衛藤氏が多く、その率は衛藤の四・八に対し江藤は一である。そして山間部に衛藤、海岸部に江藤が多いが、これを市町村別に見るともともと衛藤氏の多いのが大野郡緒方町、ついで同郡大野町(以下清川村、三重町、竹田市と続く)。もともと江藤氏の多いのが佐伯市、以下津久見市、臼杵市、三重町の順である。

さて、江藤氏は寛政系図によると、藤原氏支流で宗親の後ということになっている。尊卑文脈を見ると、藤原氏には宗親と称した人物が八人あり、摂関家や清華家関係が五人、諸国の受領や衛門府の武人が三人ある。江藤氏は近江椽から出た近藤氏や遠江守を祖とする遠藤氏のように地名(職名)からきた苗字ではなく、衛藤氏を書き替えた苗字といわれている。

そこで私は公家、殿上人の藤原宗親でなく、左右衛門府の武官だった宗親を探して見た。その一が利仁流藤原氏、河合権守齊藤助宗の子右衛門尉宗景の三男に右馬允宗親がある。この人は建久年間から承久ごろまでの人物で、北面の武士となり右衛門尉宗長と改名した。この宗長の十一男左衛門尉宗直の二男にまた宗親があるが、こ

れは同族助継の養子になって左衛門尉助長と改めた。その二は秀郷流藤原氏、小山氏の族中沼淡路守宗政の後で鎌倉末期の人物だが、中沼氏を苗字にしている。

この三人の宗親のうち右馬允宗親こと右衛門尉宗長の五男宗澄も右衛門尉となり武者所に出仕したが、その子右衛門尉宗利が族を衛藤と称したという。

しかし、豊後の衛藤氏には宗親の末という伝承はなく、大友左近将監能直に従って下向した「大友十二筋」の家柄といわれる親縁者の一人で、能直側近の将領である。

伝えられる衛藤氏系図によると、藤中納言兼輔六代の孫右衛門佐仲頼が衛藤と号し、二男義保が権介、その子行経が衛藤太と称しているが、豊後衛藤は義保の弟で常陸坊阿闍梨長寂という山僧（比叡山の僧）の子衛藤三と称した道念（俗名不明）からでており、道念十六代の孫が衛藤刑部大輔国家で大友能直に随身して豊後国に下向している。

これを尊卑文脈に対照すると、中納言兼輔の子が刑部大輔雅正たまたま、その子為長は従五位上陸奥守、つまり陸奥の受領である。この系統には文雅の人が多く、始祖兼輔は『堤中納言物語』の作者として名を知られ、雅正の長男

で為長の兄にあたる太皇太后宮亮為頼は歌人、為長の弟為時もまた歌人であり、為時の女に『源氏物語』の作者で有名な紫式部がある。

陸奥守為長の子が出雲・甲斐権守を歴任した頼経、その子に泰経、頼孝、頼季、頼信の四子があるが、豊後衛藤氏系図では頼経の子は頼季、泰季の二子である。そして頼季は駿河守としてあるので尊卑文脈の頼季の官職と同じだが、衛藤氏の祖になっている泰季は頼季の弟で、職名は二条殿としてある。一方、文脈では頼季は三男で泰季の名はなく、泰季に相当する人物に長男の泰経があり、その職名は二条関白勾当である。このあたりから衛藤氏系図作者の作意が見えてくる。

泰経（泰季）の子頼綱は伯耆守藤原頼業の子になり、伯耆治部少丞頼綱と称し、伯耆国に住んだという。この頼綱には子がなく、清和源氏源満政の裔である駿河守忠隆の子義経を養子にした。これが安芸権守義経で、衛藤氏（江藤氏）に清和源氏説があるのはこのためであろう。ここから先の衛藤氏系図は作意が露骨になるからあまり信用はおけないが、安芸権守義経の二男仲頼が右衛門佐（北面の武士）になり、衛門府の藤原氏というので衛

藤と号したと註してある。しかし、文脈では仲頼は義経の四男で院判官代と称し仲方と行綱の二子がある。ともあれ衛藤氏系図は右衛門佐仲頼を始祖とし、仲頼の二男権介義保（文脈・義経の長男右馬頭義保、乃津冠者と号す）の子に衛藤大行経、その子に衛藤次親頼（近江守）。仲頼の四男山僧常陸房長寂の子に衛藤七成道があり、この成道の弟道念（衛藤三と称す）の後が豊後衛藤氏になっている。

前述したように大友能直に随身したという衛藤刑部大輔国家は道念十六代の孫になっているが、年代的に見ると十二、三代は余計な世代になる。佐伯地方の江藤氏は本姓は衛藤で、刑部大輔国家二十三代の孫左京進貞義の子衛藤刑部丞景友に出ているという。衛藤氏系図、刑部丞景友の註記には次のようにある。

大神惟教之家臣と成り佐伯に住す。弘治三年五月上旬、大神惟教と豫州に渡海、武勇才智有名之士なり。永禄十一戊辰年十月、毛利元就九州を責む、此時四国より佐賀関に着。烏帽子嶽之城に戦ひ、武勇を顕す。

後佐伯飯（婦）住む。

景友の子が彦右衛門教貞で、この時衛藤を江藤に改めたが、佐伯氏亡滅後、古市村の大庄屋になった。彦右衛門の子が又右衛門、その弟が法輪山善教寺を中興した行念（往還院行念）である。なお善教寺十三世小栗布岳の説によると、善教寺（古市村栗本）の創建は文龜二年（一五〇二）で、建立したのは江藤大庄屋の初代江藤安兵衛であるという。

明治七年（一八七四）二月、佐賀の乱を起した江藤新平は佐賀藩士江藤助左衛門胤光の子で、明治新政府の司法卿となり、改定律例を制定し後参議になったが、征韓論破れて下野、板垣退助らと民選議院設立を建白したが、政府の容れるところとならず、ついに反政府の兵乱を起し、賊名をうけて処刑された。

この江藤氏は肥前の名族で、桓武平氏良文流千葉氏の一族である。千葉介常胤の裔孫千葉宗胤の子大隅守胤貞は建武のころ南朝方として九州に下り、肥前千葉氏の祖になったが、その一族で肥前小城おぎまぎに拠った胤晴の後胤継が江藤氏を名乗ったといわれる。

佐伯地方の江藤氏は大友旗下の衛藤氏の流れと伝えられているが、それは佐伯氏時代から居住していた一族で、

毛利高政が日田隈城を領していたとき、仕えた家臣群のなかに江藤氏があり、廃藩置県当時、旧藩士に五家あった。うち三家が士分、二家が足輕組であったが、いずれも出自は明瞭でない。

概観的には衛藤氏は藤原氏系で、このうちから清和源氏を称する江藤氏がでている。肥前江藤氏は桓武平氏千葉氏族であるが、県南海岸部に多い江藤氏にはこの流れがあるかも知れない。また恵藤と書く氏もあるようだが、県南では大野郡千歳村に数家ある。

◇ 首藤氏は大友家臣団の有力者

首藤氏は県中央部から県南部にかけて分布している。その場合だいたい衛藤・江藤氏と重なり、かなり集中的に分布するが、佐伯地方ではとくに多い姓氏ではない。首藤は「しゅどう」ではなく「すどう」と読むのが正しいが、本県では主に「しゅどう」と読んでいるようだ。文字も須藤、守藤、主藤、周藤と書き分けているが、同一氏族だといわれている。なお大野郡に春藤、臼杵地方に師藤、佐伯地方に簀戸があるが、いずれも首藤を書き替えた苗字といつてよい。

首藤氏は衛藤氏と同様、大友能直に従って関東から豊後に下ってきた武者の姓氏で、いわゆる「大友十二筋」の家柄、大友宗麟の家臣団のうちお下り衆または新参衆といわれた諸氏百五十家の一つである。しかし、伝えられる系図も系譜もないので、こうした伝承だけでこの苗字を説明しなければならない。

首藤氏は藤原氏を仮冒しているが、本来は守部氏族であるという。(守部は大碓命の裔、守公の後で、守公の私有部曲が美濃国守部である。平安中期にはその族長は守部朝臣を賜った。)

尊卑文脈によると、藤原秀郷の裔である佐藤公清の子助清が主馬首だったので、首藤と号したことになる。もっとも助清の註記に「三河国の住人、主藤又は守藤、本姓守部氏。主馬首となるにより首藤と号す。」とある。助清の子助道は首藤権守と称し、その子が首藤太親清、以下子親通(下野権守)、子朝通(大蔵権大輔)、子高通(左衛門尉)、子高清と続いている。また首藤太親清の弟通清は鎌田権守と号し鎌田氏の祖といわれ、源義朝の士であった正清は通清の子である。

また山内・首藤系図によると、首藤氏は藤原北家流で

も小一条左大臣師尹の後で、伊豫守為任の孫通家に出て

いる。一説ではこの通家は関白道長の四男権大納言長家

の子であるが（尊卑文脈では長家の子に散位道家がある）

秀郷流の相模守公光の養子になり武士になったという。

ともあれ山内・首藤系図には通家の子に資清があり、資清は父通家の任国で生れ、主馬首になったが、通家の上

洛に従って美濃国に到ったとき、同国席田郡司大和介守

部資信の猶子となり、守藤大夫と号した。資清の子が守

藤権守資通、その子通義（尊卑文脈は首藤太親清の子義通）が山内・首藤の祖となっている。通義の子俊通の長

男俊綱は須藤滝口と称して北面の武者、次男経俊は馬允

といい首藤氏を称し、子重俊の後が山内氏を称して全国

に繁延したが、丹波山内氏の族から山内一豊が出た。

一方、那須系図には資清のところに

「通家の子資清は父在国の時出生の子也。然而して通

家上洛の時、濃州に逗留せしに、同国席田郡司大和介

守部朝臣資信子なし、依て資清を養ひ子とし婿となす。

其後源頼義朝臣に属す。本姓の藤原氏と養父の姓守部

を合せて守藤と称す。其後上洛、軍忠に依り主馬首に

任ず、これに依て子孫首藤と号す」

と註してある。

首藤氏と須藤氏は同苗の一族である。下野国那須氏系

図によると、那須氏は関白道長の子大納言長家の後で、

その子通家るとき受領となって関東に下り、子貞信は須藤権守と号し、始めて下野国那須郡司となった。その貞

信の子が須藤太郎資通で、子資満も須藤太郎を称した。

孫資房のとき那須氏を名乗り、子宗資（那須武者所）、

その子資隆と継いだが、資隆の弟隆良の後がまた須藤氏を称した。

佐伯地方には首藤氏はあるが須藤氏はない。旧佐伯藩

士には中小姓並に首藤氏があり、屋敷は本町角（樹形に

面した所、現在の佐伯郵便局横）にあった。

◇ 利仁流齊藤氏は全国的な大族

藤の字のつく苗字で、齊藤氏は佐藤氏、伊藤氏などと

共に全国的な大族である。「お名前博士」といわれた故

佐久間英氏の統計によると、佐藤氏は全国第二位で約百

九十万、伊藤氏は第九位で約七十万、その次が齊藤氏で

第十位約六十万となっている。大分県だけの統計はわか

らないが、私の統計では県南市郡はだいたい約百八十というところで、このうち佐伯地方がもっとも少なく約十四、五戸になっている。

しかし、歴史的には中世末期の大友氏にとって斉藤氏は重臣の一人であったし、また近世に入っては旧佐伯藩毛利氏にとっても、初代高政の佐伯入りに扈從した近臣の一人に斉藤氏があった。

斉藤氏は藤原氏北家左大臣魚名の後裔で、鎮守府將軍利仁の子齊宮寮頭叙用の族、叙用が斉藤と号したところからこの一党を斉藤党という。さきに記述した後藤、加藤、衛藤の各氏はいずれも斉藤氏から分れた斉藤党の氏族である。

斉藤氏の本拠は北陸地方で、加賀・能登・越中に拡がり、やがては武蔵・美濃・甲斐などに分布、しだいに全国的に繁延した。斉藤党には加賀斉藤・能登斉藤・弘岡斉藤・吉原斉藤・河合斉藤・疋田ひら斉藤・鏡かやま斉藤・長井斉藤・勢多斉藤・美濃斉藤などの各流がある。

加賀斉藤は叙用の孫加賀介忠頼の後で、子忠親その子至孝、忠親の弟時明の子良時その子致任というように加賀介を称した者が多い。前述した加藤氏は忠頼の弟豊後

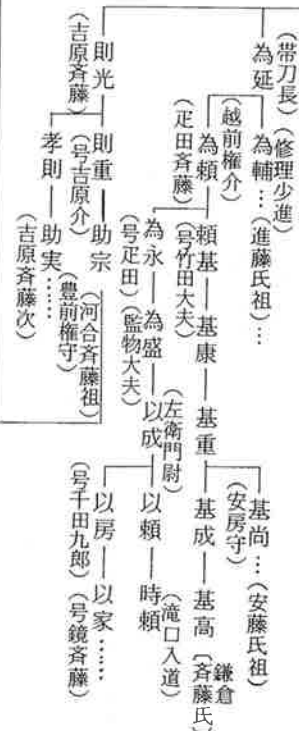
守重光の後だが、重光の曾孫景道が加賀介に任じたため加藤と号した。忠頼の末子吉宗の孫豊前守貞宗、その弟富樫介家国はともに加賀国に住み、家国は石川郡富樫郷（荘）を領したので富樫介を名乗り、その子孫は富樫氏を称し後加賀国の守護になった。一方貞宗の子貞光は同郡林埜郷に住み加賀介になったので林介と号した。貞光の子光家の後は加賀の国中に拡がり、大桑・豊田・松任・安田・山上・横江・近岡・石浦などの諸氏に分れ、光家の弟成家の系統からは板津・白江・倉光・宮永の諸氏に分れた。また光家の子光成の孫豊田弥二郎光忠、その弟飯河三郎資光、藤井六郎光基は能登国に住み、能登斉藤の族を称し、光成の二男弘岡三郎利成の子重光は弘岡斉藤次と称した。

加賀介忠頼の三弟伊傳これすけは上洛して冷泉院藏人となり、従五位下散位民部少輔までなったが、越前国押領使として越前国に下った。伊傳の子という駿河守公則は後藤氏の祖と伝えられるが、実は文徳源氏河内守源章経の子で伊傳の猶子となり藤原姓を称したという。後藤氏のなかに源姓を称する者があるのは、この伝承によるものといわれる。

〔齊藤党略系〕

▽(鎮守府將軍) 藤原利仁 — (齊宮寮頭) 叙用 — 古信 — 忠賴 — 忠親 — 貞宗 — 貞光 — (林・豊田・弘岡氏祖)
 (号齊藤)

(加賀守) 吉信 — (加賀齊藤祖) 忠賴 — (加賀介) 忠親 — 貞宗 — 貞光 — (林・豊田・弘岡氏祖)
 (加賀介) 吉宗 — 宗助 — 家国 — (富樫氏祖) — (左衛門尉) 重光 — 貞正 — 正重 — (加藤氏祖) — (豊後守) 伊傳 — 公則 — (後藤氏祖) — (民部少輔)



(左馬允) 實遠 — 実直 — 実盛 — 盛房 — 景房 — 利晴 — 利忠 — 利三 — 女 (春日局) (尾張守)
 (左衛門尉) 成実 — 実信 — 實景 — (勢多齊藤) (齊藤別当) (号齊藤五)
 (右衛門尉) 宗景 — 宗長 — 宗澄 — (衛藤氏祖) (右衛門尉)
 (号赤塚) 本名宗親 — 景頼 — 親頼 — 頼茂 — 利永 — 利藤 — (稲葉山城を築く) (美濃齊藤氏) (齊藤道三はこの後を襲う) (妙椿)

齊藤党系図（尊卑文脈）によると、伊傳の子は五人、長が公則、次が為利、三が為時、四が為延、五が則光である。四子為延は小一条院の帯刀長であったが、越前国に下り北陸七道押領使と称した。疋田齊藤の始祖である。為延の長男為輔は修理少進に任ぜられたのでその族を進藤氏と号した。次男は行用、三男は為頼、四男は為兼だが、為頼が嫡家として父の職を継ぎ疋田大夫と称した。為頼の長男頼基の後は代々滝口の武士となったが、頼基の曾孫勘解由判官基成は齊藤氏を称して鎌倉幕府に仕え、子孫には引付衆や評定衆など幕府の要職につく者が出た。この齊藤氏からは竹田・野本・河口・岡田・安藤などの諸氏が分れた。為頼の三男は宇田五郎成真、その子が葦崎太郎元貞。四男為永は掃部允になり疋田大夫と号した。この族を疋田齊藤の嫡流とするが、為永の長男為忠は阿波権守となり通称を千田権守と号したので子孫は千田氏を称した。疋田齊藤は為永の三男為盛が継ぎ、その子以成は左衛門尉に任じたが、実は織部正大江通景の子で、為永の外孫であるため統を継いだという。以成の三男以頼（又は茂頼）の子時頼は「平家物語」巻十に登場する滝口入道齊藤時頼である。

三条の齊藤左衛門茂頼が子に、齊藤滝口時頼とて、もとは小松殿の侍たりしが、十三の年本所（滝口の陣所、宮中の警固をする武士の詰所）へ参りたり。建礼門院の雑司（下仕えの女房）横笛と云ふ女あり、滝口これに最愛す。一略、父の強意見で時頼は「…夢幻の世の中に、醜き者を、片時も見て何かせん。思はしき者を見んとすれば、父の命に背くに似たり。……」とて十九の年、髻切つて、嵯峨の往生院に行ひすましてぞ居たりける。以下略

これを聞いた横笛が嵯峨の往生院を訪ねたが、滝口入道は逢わず、避けて高野山に上り清浄心院で行ないました。横笛は尼となり奈良の法華寺に入ったが、積る思いに身を焼き病んで終に死んだという悲恋物語である。高山樗牛にこの物語に取材した「滝口入道」の作品がある。

吉原齊藤は伊傳の末子吉原四郎則光の後で、則光の孫助実は吉原齊藤次と号している。則光の長男越前権介則重の子助宗は河合権守と号したことから、その子孫を河合齊藤と称したが、助宗の子左馬允実遠の長男実直は武蔵国幡羅郡長井に住み、長井齊藤太実直といった。実遠

の二男実盛は兄実直を継ぎ長井齊藤別当と号したが、一説では実直の弟とする。尊卑文脈には

「齊藤別当、武蔵国住人、長井齊藤と号す。実直の子なり。平家の侍に而云々、加賀国篠原合戦の時討死す。老後白髪を染めて合戦せし人なり。齊藤別当の子孫武蔵に在り、或は在藤と云ふ」

と註してある。武蔵齊藤氏はこの長井齊藤の後で、実盛の子が齊藤五盛房、その子が尾張守景房。武蔵齊藤氏二十余家はいずれも長井齊藤の流であるという。

河合齊藤は豊前権守助宗を始祖とし、長男実遠の末は長井齊藤となり、次男成実の後は主として越前に居り都筑・藤島・志原・中村・木田の諸氏が分れた。この流で成実の次男実信の子実景は上洛して松殿関白基房の内舎人となり、その子孫は勢多齊藤と号した。また実景の弟実利は崇徳院の武者所で安原氏の祖である。

助宗の三男景実の子実澄は越前介となり稲津新介と号した。その族には河合・松本・綾部の諸氏があり、助宗の四男宗景は赤塚右衛門大夫といひ、この裔から美濃河合齊藤氏が出た。

美濃齊藤氏には四流がある。その一は長井齊藤氏族で

実盛七代の孫利行の後、利晴の孫利忠の子が明智光秀の老臣だった齊藤内蔵助利三である。利三の女が徳川三代将軍家光の乳母於福の方春日局、利三の子宗利は加藤清正の士として勇名をさせた齊藤立本のことという。

その二は河合齊藤氏族で美濃齊藤の本流といつてよい。すなわち河合齊藤の祖助宗の四男宗景の子で、美濃の守護土岐氏の執事だった右衛門尉宗長に出ており、宗長の子（八男）が左衛門尉景頼、その子左衛門尉親頼が美濃の守護代となった。親頼の孫利藤のとき稲葉山城に拠り、以後利国、利親、利良と伝えたが、当時守護土岐氏に内証が続き、土岐氏の実権は利親の弟長井豊後守利隆の子利安に移っていた。これが長井長弘で、この長弘にとり入って家人となった油商人が西村勘九郎、彼は守護土岐政頼の弟頼芸に接近してその信望を得、政頼の家宰長井長弘を殺して長井新九郎規秀と名乗り、さらに守護代齊藤氏が断絶したのをよいことにその名称を継いで齊藤左近大夫利政と改めた。戦国時代の奸雄といわれた齊藤山城守秀龍こと齊藤道三である。

その三は美濃齊藤の篡奪者齊藤道三の子孫で、道三の子義龍の弟という道利から出た齊藤氏で、道三の前名長



代のしこ
氏で
藤な
齊家
濃家
美表

井新九郎の跡を立てた。道利、定利、利中と長井系図に見える。その四は土岐頼芸の子で徳川幕府の奥高家になった頼次の子齊藤外記頼吉と頼次の弟齊藤七郎頼重で、

ともに美濃の旧族齊藤氏の名跡を立て、幕府に仕えた。なお美濃齊藤氏は家紋に「瞿麥」「矢筈」「石畳」等を用いたが、一族を通じての代表家紋は「瞿麥」である。

前述したように佐伯地方には齊藤氏が少ない。天保一嘉永ごろの「御家中席帳」によると、家老職に齊藤多膳側用人に齊藤衛士がある。齊藤多膳は名を澄憲といい、十一代佐伯藩主毛利高泰（安房守）の老職をつとめた人物。明治末年から大正年間にかけて青少年教育家として知られた野村越三（本姓齊藤）、その弟で同人隊（少年修練団体）の組織者であり、第二代佐伯市長（昭和十七年二月―二十一年三月）になった阿南卓はいづれも齊藤澄憲の裔孫である。

佐伯藩祖毛利高政が日田隈城から佐伯荘二万石に移されたとき、高政に従って佐伯に入った家臣中に齊藤権右衛門がある。寛永九年（一六三二）六月、肥後の加藤家

が改易、城受取りのため佐伯藩も出動したが、権右衛門は当主高成（二代）の従士として騎馬三十八騎の中にあつた。（このとき出動した総人数は八百余人だつた）

佐伯藩の齊藤氏が日田で毛利高政の家臣になったことは容易に想像されるが、さてどの系統の齊藤氏であるか明確でない。しかし、地域的には大友氏の遺臣で、大友時代に「お下り衆」といわれた齊藤氏のような気がする。

天文十九年（一八五〇）二月におこつた「大友二階崩れの變」に義鎮（宗麟）方の重臣として大守義鑑に憎まれ殺された齊藤播磨守（長実か）、弘治年中に主君大友義鎮の勘気をうけて伊豫に亡命した佐伯紀伊守惟教の不在中、数年柵牟礼城代として佐伯にあつた齊藤兵部少輔鎮実などは守護大名大友氏の盛時をつくつた世臣である。ことに鎮実は永禄末年から天正にかけて、筑前・筑後方面で活動し、その本拠は筑後地方にあつたらしい。鎮実は天正六年（一五七八）十一月、日向高城の戦（耳川の戦）に佐伯惟教や田北鎮周と運命を共にし、乱軍中に戦死した。

（つづく）